各中学校代表の少年の主張を紹介します

昨年7月1日に少年の主張玉村町大会が開催され、玉村中学校と南中学校の代表3人ずつ、計6人が日頃感じていることなどを発表しました。

そのときの発表の内容を、今月号で玉村中学校の3人の主張をご紹介し、来月号で南中学校の3人の主張をご紹介します。

（順不同、敬称略）

「生物多様性」で生きる

大塚　愛名

〝生きる〟というものはなにか。私たちが今ここに立ち、生きていられるのはどれほどの幸せなことであるか。私はとても考えさせられた。

蟻がいた。蟻を足で踏んだ。蟻が死んだ。一つの命が消された。ということは私は一つの命を奪ったということ。私たち人間にも命がある、というと人間の命を奪ったのと同じだ。でも、重い罪となることはない。それは、動物がそれほど大切にされていないということなのか。もしかしたら私たち人間の生活や活動の仕方でいなくなってしまう動物がいるのだろうか。〝絶滅〟してしまう動物がいるのだろうか。

〝絶滅〟すっかり滅びて絶えること。あまり良い言葉には聞こえない。絶滅と動物を合わせると絶滅危惧種が頭に浮かぶ。絶滅危惧種とは絶滅の危険があるという動物のこと。絶滅危惧種は7万6千種の動物の中から、絶滅しそうな種は2万2千種もいる。哺乳類ではおよそ5種に1種、両生類ではなんと4種に1種。多いのか、少ないのか、よくわからない。

絶滅のスピードはどんどん加速しているという。絶滅危惧種が絶滅の危機に面している原因は「地球温暖化」「水質汚染」「土地開発」「森林伐採」「戦争」などで、動物に被害をおよぼす。こう見るとどれも人間の行動が関わっている。悪く言えば私たちのせいで絶滅してしまう動物がいる。私はそれを耳にして、残酷な気持ちになり、どうにかして解決すべきだと思った。

私たちが絶滅危惧種にできることはなにか。それは身近なもの。省エネだったり、ゴミを減らしたりできる。そうすれば地球温暖化がなくなって、川や海の水がきれいになったりと動物たちが過ごしやすい地となる。だから私はそれを実践していくべきだと思った。この活動が日本全体に広まり、世界の人々全員が実施していくことで絶滅危惧種だけでなく今ある自然を守ることができると思う。

世界でも自然保護として活動している、国際自然保護連合（IUCN）がある。1948年に創設された、国際的な自然保護団体だ。私たちも、もう少し自然について興味を持ち、自然を守っていく方法を真剣に考えていくべきだと思う。なぜなら、動物の危機は私たちの危機でもあるから。例えば植物は、私たちの呼吸に必要な酸素を作りだしている。その植物の命は、昆虫が花粉を運んだり、動物の死がいが栄養になったりして育まれている。つまり、地球上にはたくさんの種類の生き物がいて、お互いにつながり合って生きている。これを「生物多様性」と呼ぶ。動物やそのほかの生き物の絶滅によって、こうした命のつながりがいなくなってしまうと私たちは生きていけなくなる。

こうして自然界で生きていく中で動物同士植物同士お互いに大切にし合うことが大事だと思う。「生物多様性」のつながりで生きていること理解をするべき。でも、植物や喋れない動物などが大切にしたり、自然保護について考えることは難しい。それをできるのは私たち人間。以前、私は尾瀬に行き自然と触れあうことができた。尾瀬では、植物を踏まれないように木道があったり、観光客がもってきた種を、植物にふれないように種取りマットを入り口に設置してあったりした。こういった工夫を考えられるのも私たち人間。私たち人間が動くことで自然が変わる、変われる。そして私たちも快適な生活が送れる。こんなにも私たちの力でできる物事がある。ちょっとした生活の見直し、意識をすることで、大規模なものになると世界中の人に知ってほしい。

私は、中学生ながら自然を守っていきたいと思った。

夢

富澤　南

皆さんは、夢を持っていますか。夢を持っている人、持っていない人、まだよく分からない人、皆さん人それぞれだと思います。私は夢を持っています。私の夢は、パティシエになることです。

私が夢を持ったきっかけは、小学生のころでした。昔からお菓子が大好きだった私は、母と一緒にお菓子を作ったり、お店に買いに行ったりしていました。そのころは食べることが好きでした。私が4年生のころ、ケーキを買おうとお店に行った日のことでした。いつものようにどのケーキを買おうか迷っているとき、ふと思いました。

「このケーキは誰が作っているんだろう」

気になったので調べてみると、パティシエという仕事を見つけました。その日から私は、お菓子を食べることよりも作ることに魅力を感じるようになりました。

ある日、学校で「自分のなりたい職業」という授業がありました。私は真っ先にパティシエについて調べました。必要な資格や仕事内容、さまざまなことを知りました。そして私はパティシエの辛さも知りました。パティシエになれる人はほんのひと握りです。パティシエになれたとしても、早朝から夜遅くまで仕事をして、鉄板などの重い物を扱う重労働です。私は、パティシエという仕事は華やかなものだと思っていました。だから、とても衝撃を受けました。

そのころ、私は母からパティシエについて反対されていました。母の知り合いに、パティシエの夢を叶えた人がいました。彼女は、パティシエとして仕事を頑張っていたそうです。しかし、彼女はパティシエを辞めてしまいました。理由は、重労働に耐えられなくなったからです。私は母からその話を聞き、改めてパティシエの大変さを感じました。「私がパティシエになるのは無理なのだろうか」と私は悩み始めました。

私は、母に反対されてからお菓子を作らなくなりました。私はパティシエを諦めるか、諦めないか悩むことをやめました。そのかわりに、自分の夢と向き合うことから逃げました。もうどうすればいいのか分からなくなっていました。

ある日、自分の部屋を片付けていると一冊のノートを見つけました。「お菓子ノート」は私がお菓子作りに使っていたノートです。ノートを開けてみると、今まで作ってきたお菓子の材料、レシピ、問題点などたくさん書いてあって、ノートが真っ黒になっていました。ノートを見ていると、さまざまな思い出がよみがえってきました。クッキーを焦がしてしまったとき、悔しかったことやオリジナルケーキがおいしくできたとき、本当にうれしかったこと、そのノートには私のたくさんの思い出が詰まっていました。「私はまだお菓子が好きなんだ」。そのとき私は、パティシエという夢を諦めたくないと強く思いました。

私は、夢を持つことは大切だと思います。中には「夢なんてなくても大丈夫」「現実を見ろ」と思う人もいると思います。たしかに、夢を持っていない人も数多くいます。現実を見ることも大切です。だけど私は、パティシエになりたいという夢からさまざまなことを学びました。自分が本当にお菓子が好きだということ、自分は辛くなったらすぐに逃げ出してしまう人だということ、他にもたくさんありました。それらのことは、夢を持っていたからこそ知ることができました。だから、どんなに小さなことでも自分の夢を持ってほしいです。自分の夢を追いかけてみませんか。

仲間を信じ仲間に感謝

金子　愛

「やだよ。いいたくない」

これが私の口ぐせだった。私はメンタルが弱い。勝負面も、友人関係も心が先に折れてしまうのだ。友だちに注意するなんてもってのほか、そんなことできるわけがない。自分でも自覚していた。

私は小学生のとき、スポーツ少年団で、バレーボールのキャプテンを努めた。母はコーチで人一倍怒られる毎日であった。チームメイトとは私がまとめられないのがきっかけでよく仲たがいをしていた。私はキャプテンとしての役目を果たしていなかったのだ。そんな毎日を過ごしているとある日私の信頼している指導者にきっぱり言われてしまったのだ。

「お前はキャプテン失格だ」

心に刺さった。小学生の私の小さい心に重い石が落ちたようだ。人の上に立つということは大きな責任がある。だから、私は年が同じ友だちにも、「声を出して」「真剣にやって」などの注意をしなければならない。だが、私は友だちが大好きだ。そんな人を傷つけることはしたくない。嫌だ。嫌だ。きらわれたらどうしよう怖い。そんな言葉が頭をよぎる。ふと思った。なぜこんなつらい思いをして一緒にいなければならないのだろうか。友だちとはなんなのだろう。そんな疑問を抱いたまま私は中学校に入学していた。部活動が始まり、私は再びキャプテンとなった。

ああでた。私の口ぐせ。

「やだよ。いいたくない」

どうして自分の意志ではないのに友だちを傷つけなければいけないのか。どうして私なの、と。そんなことを思っていると私の友だちへの口調も強くなる。私はただのひどい奴になっていたのだ。そしてふと気づいた。バレー部の友だちは私が厳しく接しても突き放したりしない。友だちじゃないだろ仲間だろ。たとえ私が「声を出して！」と強くいったとしてもついてきてくれる。そう思った。私は自分だけで考えていたが私には仲間がいる。私が皆のためにという気持ちを持っていれば受けとめてくれる。友だちと仲間は少し違う。本音で語りあえるのが仲間というものだ。私が所属しているバレー部の仲間は驚くほど前向きで部活に対して一生懸命である。最初からそうだったわけではない。私も支えてくれる仲間のおかげで成長できた。仲間がいるから怖いことにも立ち向かえ、成長することができるのではないだろうか。これはあくまで私だけの考えで、違う考えを持つ人も中にはいると思う。しかし、私はこの集団に所属してよかったと思う。私の気持ちを変えてくれたのは切磋琢磨した仲間だ。だから私は仲間に感謝したい。そう思えるようになったのも仲間のおかげだ。私は友だちに注意するのは怖い。しかし、仲間に注意するのは怖くない。だって信じているから。これが友だちと仲間の違いだと私は考える。

私はもうメンタルが弱いなんて誰にも言わせない。仲間がいる限り私は一人じゃない。だからもう私の口からはあの嫌な口ぐせは出ない。

これは学校だけでなく、日本という大きな仲間でもいえることであり、私たちが願っていることでもあると思う。だから傷つけあうのはやめて信じあうことを私は願う。なんだかんだいって人間は一人じゃ生きていけない。そんな大切な存在だと私は皆さんに気づいてもらいたい。いなくなってからでは遅い。あとで後悔は山ほどする。だから今仲間とチャレンジしてみてほしい。

「仲間を信じ、仲間に感謝」

これが今の私のあるべき姿だと考えている。